

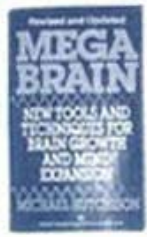
ミリオンセラー作家：マイケル・ハッチソン氏インタビュー
『メガブレイン』の著者が語るマインドマシンの真実



ところ：サン・ラファエル、カリフォルニア Good Earth Resturant にて
と き：1992年7月8日
インタビュー：MM8
通 訳：Yoko Kobayashi

専門誌『パイレイ』5.6 合併号より(1994年・株式会社エムエムエイト刊)
<http://www.style21.co.jp>

2014年10月PDF版再編集



ビジネスマン必読！ ベストセラー『メガブレイン』

MM8：ハッチソンさん、あなたは『メガブレイン』の著者として、またニューズレター『メガブレイン・リポート』の編集者として、そして意識テクノロジーという全く新しい分野の可能性を人々に伝えるというユニークな活動を展開している方として、私達は大いに注目しています。残念ながら『メガブレイン』は、まだ日本では出ていません（2000年に日本語版発刊）。そこで今日は、著者のあなたから、直接お話を伺いたいと思います。

ハッチソン：『メガブレイン』の執筆に際しては、科学的な正確さに留意し、意図的にニューエイジ及びそれらに関する話題は避けました。また、読者の大半が疑問を感じたり、奇妙に感じるものも避けました。これは、特にビジネス関係の人々や、多くの人に読んでもらいたいという目的を持ってしたことです。彼らは、この種の話題に関しては非常に保守的です。ですから、特に科学的な真実性を強調したつもりです。

この本には、人類をより高い精神能力や創造性へ進化させるという根底の意味、隠されたメッセージがあります。この本が日本で出版された暁には、ストレス・レベルを下げる必要のあるビジネス関係の方々に、是非読んで欲しいと願っています。

テクノロジーが生み出した世界の中で、今、我々は大きな変化に直面しています。環境に適応するために、生物は色々な変化、進化を通して現在に至っています。マインドマシンの使用によって、知性を高め意識を高めていけば、テクノロジーが生み出した問題に直面しても、進化の一環として対応し創造的に解決できるでしょう。そういう役割を、私の本も「マインドマシン」も担っているのではないのでしょうか。

MM8：確かに私達もそう思います。





情報を提供することが私の使命

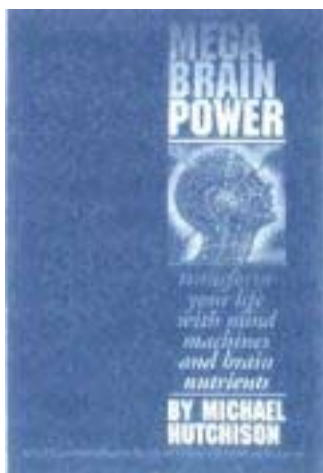
ハッチソン：ですから『メガブレイン』が日本語で出版され、多くの人に読まれることを期待しています。この本は、この分野への一般的な紹介ですから、出版されれば「マインドマシン」のクラブやスパなどの数も増えるでしょう。その時に『メガブレイン・パワー』を、色々な機器の使い方を紹介するために出版できるよう手配したいと思います。

MM8：それは非常に大事なインフォメーションです。日本では、我々が雑誌やニューズレターで知らせた情報以外ほとんどこの分野の情報は出ていません。

ハッチソン：教育は必要不可欠です。そのために最近ロバート・オースティン（シネティック社社長）やラリー・ミニカス（シネティック社副社長－現 A/V スティム社社長－マインドスパ発売元）と一緒に仕事ををするようになったのです。私は特にシネティック社の製品やその活動だけを他のもの以上に是認しているわけではありませんが、彼らがライト&サウンド・テクノロジーの歴史やライト&サウンド機器の研究に関する記事、さらにこのニューズレターの「娯楽を超えて」を転載することを許可しました。

この「ピーク・パフォーマンスと自己変容のためのマインドマシンの使い方」は、充実したリラクゼーション、覚醒瞑想、禅タイプの瞑想であるオープン・フォーカス、加速学習、セッションの前・最中・後での使い方、催眠、自己暗示、自己実現などについて書いてあります。シネティック社では、これらの記事を小さなブックレットにして、彼らの製品と一緒に配布する予定です。そうすれば、製品を購入した人はその機器の使い方や、「マインドマシン」の持つ可能性などについての知識を得ることができます。

MM8：オースティン氏も「ハッチソン氏はどの製品も公平に全部書いている、その点はとてもいいことだ」と言っています。



ハッチソン：それはどうも、できるだけ偏見を持たないで、それぞれの製品を検討するように努力しています。一番大切なのは、情報を流すことだと思います。このテクノロジーに関する情報は沢山あるのですが、ほとんどの人は入手手段を持たず、またそれが存在することも知らないのです。ですから、情報を分散させ、できるだけ多くの人に知らせるのが自分の使命であると思っています。

『メガブレイン』を日本で出版したいと思うのは、現在『メガブレイン・パワー：あなたの人生を変えるマインドマシンの使い方』という新しい本を書き終えるところだからです。章ごとに異なる主題で、目的を達成するために一番合ったプログラムを紹介しています。たとえば、加速学習、ピーク・パフォーマンス、運動

訓練、免疫体の強化、痛みからの解放、中毒症の治療、ストレス療法など、いろいろな章がテーマごとに設けてあります。



「コカコーラ」と同じくらい知名度のある『メガブレイン』

MM8：ヨーロッパでの状況について知りたいのですが。

ハッチソン：『メガブレイン』のドイツ語版が出た時点で、『メガブレイン』という名前で登録した会社がすでに3社ありました。ドイツ語版が出る前に、英語版で売れていることが向こうで評判になっていました。それで名前をとって、全く関係のない3社が登録していたというわけです。1社はワークショップやセミナー用、もう1社は「マインドマシン」の製造、あとの1社は何かほかのものというふうに。

それにもかかわらず、本は『メガブレイン』のタイトルで出版され、今現在もそのままですが、よく売られています。無料の宣伝をそれらの会社のためにしているようですが、「メガブレイン」という名前自体がもう認められていて、その知名度は既にアメリカにおけるコカコーラと同じくらいです。例えば、スペインではマインドマシンを使う人たちを「メガブレインネス」と呼んでいます。スペインでもフランスでもドイツでも『メガブレイン』の名前で出版されています。ある意味では本は名前を彼らに提供したことになりますが、私が最初にその名前を使ったわけですから、彼らのためにその名前を変更するつもりはありません。

私がブレイン・テクノロジー関連情報の中心になるにつれ、より良い情報を提供し、世界の変換期に人類の意識を変える手助けになり、『メガブレイン・レポート』の中でも、また『メガブレイン』を改訂していく過程においても、高品質の機器に注意を向けるようになってきました。効果のある機器、高品質の機器、そして高い倫理観を持って製作している人々だけが、このマーケットでは生き残ります。この場合は、良貨は悪貨を駆逐するわけです。



日本でメガブレイン・マシンができたとしても、たとえば、将来『メガブレイン・レポート』の中でそのマシンを評価し、品質基準に合格しているとか言えますし、それがまた証明にもなります。ですから私は、自分の立場を活用して消費者を守り、最高品質の機器にだけ焦点を合わせる事を活動の中心におきたいのです。



我々は宇宙全体の一部である

MM8：何故こういう分野に関心を持ったのか、簡単にお話しいただけますか？

ハッチソン：いくつかあります。中心になるのは、『メガブレイン』が1986年に出版された時に目新しかった点として、通常目覚めの状態の意識は、脳のピーク時の意識ではないということでした。さらに私達に授けられた知性は、精神能力、精神潜在力の全てではないということでした。

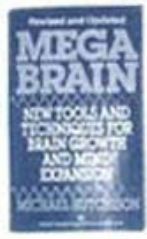
その中心になっているのは、過去20年にわたって起きた脳革命です。脳は筋肉のように、鍛練すればもっと力をつけることができるという知識です。もっと効率性の高い、調和のとれた状態で作動できるのです。適したテクノロジーと最も望ましい刺激を与えれば、脳は超充電され、あるいは高められて高度な機能状態に達することが出来るはずで

また『メガブレイン・パワー』で重要なのは、「幼児期の終わりの活動的情報と人間のバレー」というタイトルで、ニューズレターの第4版の論説で書いたことですが、人間と機械の増大する融合について述べていることです。物理学者のデイヴィッド・ポームの、宇宙には密接な関わり合いを持った2つの秩序があり、宇宙には全体性があり、宇宙のある部分は宇宙のもう一方の部分に関連するという理論に従って論じたものです。

宇宙の密接な関わり合いを下地に考えれば、人的物質とテクノロジー精神、および人的精神と機械の硬質の物質的現実が組み合わせられることによって、ある意味で精神的／肉体的分離の現実が変容すると言えるでしょう。そこにまだ希望があると思うのです。

現在の問題に直面することになった1つの原因は、人間が物質的現実から分離しているという感覚にあると思います。我々が固形物質とは異なるものであるという感覚です。けれども、コンピュータやマインドマシンなどは固形物質から作られているにも関わらず、ますます人間的になってきています。人間は、自分たちの感情や想念が、神経ペプチドや脳化学物質に基づくものであることを発見してきています。

機械を使うにつれて、仮想現実のように、機械はますます我々の一部になり、さらに我々は一層機械の一部になるのです。私の希望は、この基本的な統一性に気づき、物質界と分離していないことを知ることによって、我々は宇宙の全体性から分離しているものではなく、宇宙の全体性の一部であるという新しい世界観を再構築していくことです。



フローテーション・タンクとの出会い

MM8：なぜ、マインドマシンに興味を持ったのですか？

ハッチソン：ずっと興味があった分野ですが、60年代にサイケデリック・ドラッグなどを試したりして——私は60年代からのヒッピーの1人と言えるでしょう。ですから、ずっと意識の探求に関心を持ってきました。70年代には、ニューヨークの北部地方にあるキャッツキル山で何年か隠遁生活をしたこともあります。

MM8：何年くらい？

ハッチソン：2年半です。この時期には、何週間も誰とも話さないことがよくありました。特に冬は、地面も真っ白で、空も白、ほとんど灰色です。この中で暮らしていると感覚遮断と同じですから、よく変容された意識状態に入ったものです。

この時に、感覚遮断のフローテーション・タンクに関する本を読みました。30分で高揚された意識状態に入れるという、このフローテーション・タンクを試してみたいと思ったのです。隔離された生活でも、その状態に入るのには6カ月もかかったのですから。

何年か後に中南米に住み、中南米に関する本を書き、ニューヨークに戻ったとき、雑誌のために記事を書くようになりました。その時、マンハッタンに住んでいたのですが、角を曲がった所にフローテーション・タンクのセンターがあることを発見したのです。さっそく雑誌の編集者のところに行って、フローテーション・タンクの記事を書く仕事を貰えないかと交渉しました。自分が満足するまで徹底してフローテーション・タンクを体験するための資金、それを経費で落とせる取材費が必要でしたから……（笑）。



初めてそのタンクの中に入り、ドアが閉められ、完全な暗闇、完全な静寂が訪れたときに、私の中の声が「ああ～、やっと家に帰って来た」と言ったのです。2～3の雑誌にこの体験についての記事を書いたところ、かなりの反響があったのです。その時、私はちょうど小説を書いていました。ところが、エージェントは私に「その小説、中断してフローテーション・タンクの本書いたら？ 皆、関心を持っている」と——1982年のことですが——提案してきたのです。私も「……悪く

ないな」と思いました。なぜなら、フローテーション・タンクに関する本を書くのには、何回も体験をしなければならぬからです。自腹を切る必要もないわけだし（笑）。

とにかくこのテーマには、ものすごく興味がありました。神経科学関連の本も、できるだけたくさん読みました。さらに、神経医科学研究者を何人も取材し、生化学的に脳の中ではフローテーションの最中に何が起きているのか、左右脳半球ではその最中にどのような違いが出るのか、脳波には、電氣的にはどんな変化が起きているのか、などを知るために膨大な量の調査研究をしました。

神経医科学者たちと話していると、「この新しい電気刺激の機器について知っているか、EEG（脳波計）の発達した最新のキャットスキャンについてはどうか……」などと教えてくれました。これらについては、様々な雑誌に記事として出しましたが、フローティングに関する本は『フローティングの本（Book of Floating）』というタイトルで1984年に出版されました。この『フローティングの本』が出版された後、様々な機械や新しい機械を色々な人が持ってきました。ライト&サウンド機器、ガンツフェルト・マシン、磁場の中を移動させる機械、EEG 機器、マインド・ミラーなど……。

そうして、これらの記事を書いているうちに——これは全く新しい分野で、ほとんど知る人がいない——という事実に気づいたのです。この新しいテクノロジーの分野で、いま何か新しい事が起こっている。これらの機器を治療に使う——脳の損傷を治したり、手術中に生命徴候を監視したりする——という従来の使用法のほかに、脳に影響を及ぼして、通常より高いレベルで機能することが可能になるように活用している……。この時「これは面白い。本になる」と確信したのです。その結果、誕生したのがこの『メガブレイン』なのです。



フローテーション・タンクと ライト&サウンド機器の意識変容体験

MM8：そうすると、この本は何年費やした結果だと考えたらいいのでしょうか。

ハッチソン：初めてフローティングの体験を書いた記事が出たのが1981年、本は1984年に出ました。『メガブレイン』の本が出るまで、かなりフローティングの体験をしました。おおよそ週に2～3回、中には一晩中タンクに入っていたこともあります。

その時、膨大な量の情報を短期間で収集し、統合していったわけですから、頭がとてもよく働いていた気がします。およそ3年の間に、すべての情報が1つにまとまっていった感じです。

MM8：じゃあ、トータルで何回くらい体験しましたか？

ハッチソン：数100回になります。『フローティングの本』のほとんど、そしてその後の『メガブレイン』もフローティング中に頭の中で書き上げたものです。それはとても刺激的な体験でした。フローティングは、幻覚剤などを除けば、最も強力な精神変容体験を引き起こす体験だと思います。

MM8：今もそう考えてますか？

ハッチソン：ええ。しかし、実際問題、誰でもフローテーションができるというわけではありません。

MM8：効果をあげるためには、かなり長時間入ってないと体験できないのでは？

ハッチソン：それは個人差があります。ある人にとっては、慣れない…変な感じ…など、タンクに入ってもすぐにはリラックスできず、時間をおいて何回かのセッションを受けた後でやっとリラックスするという人もいます。かと思うと別の人は、タンクに入って2～3分でその状態に入ってしまったります。

最初、まず肉体的な感覚に非常に敏感になり、心音や呼吸などに敏感に反応します。それから肉体が消えて、残っているのは意識だけという状態になります。そして暗黒の無の空間が広がり、自分の想念をはっきりと意識し、想念を操作することが非常にたやすくなります。

他のマインドマシンも、ある程度まではシータ波やアルファ波によって代表される精神状態に誘導することは可能です。例えば、外界に関する意識が消えた、頭が澄みわたった状態です。この理由で、様々なマインドマシンは貴重だと思います。携帯サイズで何時でも使用出来、ユーザーがコントロールでき、色々なプログラムを利用できます。

これらのマシンとフローテーション・タンクの間には、ひとつ大きな違いがあります。フローテーション・タンクは、この地上で最も無重力に近い状態を創り出せるということです。体は本当に浮いて漂っていますから、他のどんなマインドマシンよりも素速く、生理学的に非常に深いリラクゼーション状態に入ります。

ひとつ、非常に効率的だと解ったのは、フローテーション・タンクとマインドマシンの併用です。例えば、私のニューヨークの友人でフロート・センターのオーナーがいますが、そこではまず、フローテーション・タンクの前に1時間かけて体の調整をします。マッサージやライト&サウンド機器を使います。その後フローテーション・タンクに入ったお客は、パン生地を寝かせるのと同様、効果がとても定着しやすくなります。ですから、センターを後にしたタンクに緊張……ということが少なくなります。まず、体の調整を受けてからタンクに入ると、体は弛緩するチャンスを与えられ、効果も速く現れ、また定着し長続きます。

ミニカス：つまりセンターに行って戻ってくると、すぐ体が緊張してしまうかわりに、体はその効果を取り入れて落ち着かせる時間ができるわけですね。

ハッチソン：ええ、セメントみたいにね。



ドライ or ウェット？

MM8：ドライ・フローテーション・タンクですが、効果は同じなのでしょう。

ハッチソン：ドライ・フローテーションには色々な改造型や種類があります。「ヴァイブラサウンド」も一種のドライ・フローテーション・タンクです。何種類かは完全密閉型で、音や光を遮断するようになっています。これらは非常に効果的で、深いリラクゼーションをもたらします。ヴァイブラサウンドの例でも分かるように、他のライト&サウンド機器と一緒に使うのに最適です。



厳密に重力から解放され、充実した深いリラクゼーションから生じる意識の変容についていうなら、ドライ・フローテーション・タンクは、ウェット・フローテーション・タンクと同じ効果を生み出すことはできません。

ウェット・フローテーション・タンクの場合には、体の下に感じる重圧感はありません。タンクの水は、皮膚表面温度と同じに保たれるので、タンクに入って最初の1～2分間で皮膚と水との境界がなくなります。水の中にいるという感覚もなく、空中にいると言っても不思議では

ありません。重圧感も境界も感じません。

この無重力状態では、体に一連の明確な効果が現れます。ひとつは、体が自分の好きな形態をとる自由を与えられることです。たとえば、クシャクシャにした薄紙を水の中に入れて、フワッと伸びますよね。ちょうどそんな感じです。重力によって縛られていないために、背骨も真っすぐになり、体は伸び、全部の筋肉は最適な形状をとる自由を与えられます。

ドライ・フローテーション・タンクの場合は、大体ベッドのような形になっています。体が沈み込むようにベッドのマットにはゼリーなどが使われ、そのゼリーを包む素材として様々な材料が試されています。できるだけ柔らかかという努力がされていますが、それでもまだゼリーの上に乗っている、という事実は変わらず厳然として残ります。重圧感も感じますから、体はウェット・フローテーション・タンクの水の中で得られるような解放感を体験することはできません。



人間とテクノロジーの融合

MM8：マインドマシンが将来もっと効果的に発展して行くとすれば、どういう方向に向かうと考えますか。サイケデリック（精神拡大薬）と同様の効果をもたらすマシンが出てくるとすれば。

ハッチソン：最初にこれは非常に大切なことで、マインドマシンについて話すときの鍵となるのですが、我々の意識を変容させているのはマインドマシンではなく、我々であるということです。ある意味では、これらのマシンはTVのチャンネルを変えるのと同じくらい簡単に、我々の脳のチャンネルを変えられるのだと教えているのです。将来のマインドマシンで一番重要なのは、我々の意識を最も効率的に変容する、その方法を教えることができる機器でしょう。

現在起きているのは、機器の感度がアップし、敏感に我々に反応するようになって来ています。これはEEGとライト&サウンド機器の組み合わせに見られる例です。この場合は、EEGが我々の脳波活動を読み取り、ライト&サウンド機器へその情報を流し、脳の状態に最も適した体験が提供されます。中にはすぐに脳の状態を変えられる人もいますが、逆にかなり時間を要する人もいます。また、同じ人でも日によって違います。EEGは、我々の脳波活動の一定のパーセンテージをフィードバックできます。たとえば、EEGは我々

の脳波活動の98%をライト&サウンド機器へ流し、その98%の割合でライト&サウンド体験を修正できます。全く同じテクノロジーを使っても、人によっては脳波をすぐに変えて、1分ほどでスッとその状態に入りますが、中には脳波がゆっくりになるまでに1時間かかる人もいます。

MM8：例えばサイケデリックの場合は、その使い方に関して色々な方法とか理論とか、タオに近いようなひとつの道ができつつあったわけですが、こういうテクノロジーに関しても将来そういう方向に行くと思いますか？

ハッチソン：それは分かりませんが、マインドマシンで面白いと思うのは、適用範囲もテクニックの間口も非常に広いことです。我々はそれぞれ生理的に異なっており、様々な刺激に対してそれぞれ違った反応を示します。人によっては視覚刺激に反応したり、聴覚刺激に反応したりと色々です。機器の種類も様々ですから、それぞれの人の特徴に合ったものを使えるでしょう。ですから、何か中心なる形式があるというわけでもありません。



色々な機器があり、その使い方には多様な道があります。リラックスのために使う人、ストレス・レベルを下げるために使う人、精神的修養のために使う人、創造性を高めたりヒーリングのために使う人、免疫体を強化するために使う人などがいます。ですから、私にとっての機器とは、この論説でも述べましたが、人間とテクノロジーの融合なのです。

テクノロジーは人間存在の一部であり、人間の力を伸ばし、そのみならず今ある人間の力を豊かにする手段なのです。テクノロジーは、人間が行きたい方向へ進むのを可能にする道具です。



マインドマシンは「ほんものの道具」

ハッチソン：もうひとつ重要なのは、『メガブレイン』の中で、私はマインドマシンを「ほんものの道具 (Tools of Authenticity)」と呼びましたが、authenticity という言葉はギリシャ語から派生したもので、auto (自己の、自らの) という意味を持ちます。つまり「自己」と何らかの関わりを持つ言葉ですが、マインドマシンを「ほんものの道具」と呼んだのは、これらの機器が我々の真我の意識を増す道具だからです。これはマインドマシンが持つ非常にユニークな特性です。

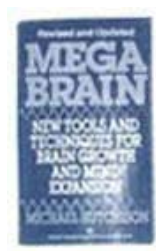
今日、私たちは何を考え、何を感じるべきかを、私達の外部の力によって日ごと命じられる世界に住んでいます。マインドマシンは、これを中和する働きをします。政府や企業、TV ネットワークが、何を考え、感じ、体験するべきかを指図している時に、これらの機器は我々が考えたいものを考え、感じたいものを感じ、体験したいものを体験しなさいと促し、人間をもっと賢くします。

我々は企業や政府が送り出すプロパガンダに対して、「プロパガンダは信じない。自分自身をマインドマシ

ンで体験し、自分が一体何者なのかを知ったから」と言えるようになります。中には、マインドマシンが精神コントロールのために使われるのではないかという懸念を表明する人もいますが、私はそれには同意できません。全く逆だと思います。これらの機器は、権力構造から我々を解放する手段であると考えています。

MM8：それに関しての意見を伺えて、非常にうれしいです。

ハッチソン：私たちは同じような意見を持っていると思います。



劇的な人生を送るためには

MM8：おしまいに、さっき頂いたこの一番新しい本について、紹介してください。

ハッチソン：『メガブレイン』に対をなす本を今書いているところですが、ほとんど終わりました。『メガブレイン・パワー：あなたの人生を変えるマインドマシンの使い方』というタイトルです。私の最初の本、『メガブレイン』ではピーク・パフォーマンスや、これらの機器の機能、効能を裏付ける科学的研究結果を紹介し、様々な機器について書きました。つまり、『メガブレイン』はハードウェアについて述べた本です。

『メガブレイン・パワー』は、それらのハードウェアと一緒に使われるソフトウェアについて述べた本です。マインドマシンがコンピュータのハードウェアであるとすれば、同じようにソフトウェアが必要になります。これまでのマインドマシンの問題は、購入後、点滅する光や面白い体験という物珍しさが消えたとき、これらの機器を系統立って一番有効に利用する方法を誰も知らなかった、というところがありました。

例えば、コンピュータを使うときに、単にコンピュータで操作されるシステムだけを取り扱うわけではありません。操作システムではあまり結果を期待できません。コンピュータの場合には、ワード・プロセッシング用、表作成用、保存用、分析用などのプログラムまたはソフトウェアがあります。マインドマシンには、体重減少、ピーク・パフォーマンス、加速学習、運動訓練、行動パターンの改善、痛みの削減、などのソフトウェアが必要です。

『メガブレイン・パワー』で私がしようとしたことは、順を追ってこれらの機器をある特定の目的に向かって、どのように使うべきか、人生を劇的に変えるためにこれらの目的を永続的に達成するための、1週間または何カ月という期間で系統立って使うプログラムを紹介することです。



性と権力の関係

ハッチソン：『性と権力の解体学』というタイトルで、『メガブレイン』の後に書いた本があります。いくつかの翻訳版では、『性と権力と政治』というタイトルで出ましたが、私達の文化の中に見られる性と権力の関係の分析をしたものです。

まず進化生態学を検討し、権力と性がいかに私達の種の進化に結びついているかを見ています。ビルハム・ブレイクの研究ですが、レイキアン心理分析学に基づいて、性的特質がどのように個別の権力に関係するかを分析したのです。それから情報理論に移り、ウイルスである思念について、つまりミメス〔Memes（編集部注：イギリスの生物学者リチャード・ダウキンスによって1976年に作られた言葉）〕の概念「意味論」について書き、ここでは伝染病を移すことと同じように、伝染性を持った思念の伝達法について検討しました。

つまり多数の人々を犯す思念がありますが、今日のそれは、対抗する他の人の概念に対する寛容のなさ、偏狭さです。人体のウイルスが競合し合うように、概念もそれに対抗する概念に対しては競合し合います。

たとえば、ある種の宗教は、他の人の考えに対する寛容さがなくなってきました。同じ宗教においても、色々な宗派の間に同様の傾向が見られます。ですから、この本の中心になっている主題は、人間社会を自由に流れる情報は人間の体を流れる性的エネルギーのようである、というものです。

ちょうどある権力機構が、性的行動を抑圧したり抑制したりするように、社会においても自由な情報の流れを抑圧し、抑圧しようとするのです。というのは、「情報」も「性」も人間が予測不可能な行動を起こす原因になるためです。すべての権力機構は、人民が予測できる範疇でのみ行動することを前提にしています。

情報理論のひとつの見方は、情報は予測性にある程度反比例する関係にある、というものです。例えば、私があなたに100%予測可能な情報を教えたとします。この場合、私を与えたものには、全く情報が含まれていない事になります。

マインドマシンは我々に情報を提供します。我々は、マインドマシンを通じて情報を得ているのです。マインドマシンは、予測不可能な刺激を我々に与えてくれるわけですが、それは我々にとっては、まさに情報なのです。例えば、幻覚剤や性的体験は我々に情報を提供します。というのは、我々が人生を予測できない形で生きるのを可能にするからです。歴史を振り返っても、権力機構はその社会の構成員の情報とその流れを管理し、性的活動を抑制してきました。

この本も進化論に基づいた論旨を展開しています。今、新しい種類の人間が進化し、出現してきています。新しい情報に心を開き、彼自身の情報構造とは異なる、他の情報に対する寛容性も持ち合わせた人間が出現してきています。私はこれを「猿が木から地上に降りて来ている」と表現しています。進化のある時点で猿は木から地上に降り立ち、平原を歩きました。サヴァンナを後ろ脚で立って歩いて渡ったのです。これは人間になる第一歩でした。

今日、猿のように木の上に留まり「これをするために我々は生まれて来たのだ。これをするために我々は創造されたのだ」と言っている人達もいれば、「木から降りて何か変わった事がないか調べてみよう」と言っている人達もいます。『性と権力の解体学』ではマインドマシンの話はしませんが、これらの見解は密接な関係にあると思います。マインドマシンは多くの人々にとって、情報入手の入口になるからです。木から降りて、新しい種類の人間に進化するための手段になるからです。これは大きなプロジェクトでした。書くのに何年も要し、扱っている項目も広範囲に及びました。



「主義主張」と呼ばれる病気を克服しよう

MM8：こういうテーマについて本質的に触れた本というのは、非常に少ないのではないかと思います。地球上の色々な文化、種々の宗教によって逆にがんじがらめになったものを、その基本的なところで、そのテーマに触れる、非常に面白い本だと思います。

ハッチソン：そう願いたいですね。この本の論点のひとつでもあるのですが、様々な宗教や文化、人々は、彼らが犯されているウイルスをもって、世界を見る傾向があります。しかし、それぞれのウイルスは、競合するウイルスに対して寛容性を持たないのです。この本はある意味においては、我々はそれを超えて進まねばならない、病気を克服しなければならないと言っているのです。それは精神の病気です。「主義主張」と呼ばれる病気です。

MM8：学生時代の専門は……何を研究？

ハッチソン：文学と哲学です。

MM8：ジャンルを問わず、学生時代〜ヒッピーだった時代に、一番影響を受けた人はいますか？

ハッチソン：それは答えるのが難しい質問です。これは融合的、統合的なプロセスですから。ずっと歴史を通じて色々な人が貢献してきました。

昔、こんなイメージが浮かんだことがあります。海の上に金色のボールが浮いていました。波間から、イルカが飛び上がって来ます。すると人間が現れ、そのボールを空中高く押し上げます。押し上げられるたびに、ボールは明るい金色に輝きます。するとプラトンが出現し、それから水面下に戻ります。次に出てくる人がまたボールを押し上げますが、それはプロティヌスであり、ピタゴラスなのです。さらにまたボールを高く押し上げる人がいます。カントでありスピノザなのです。この連綿たる活動によって、彼らはそれぞれに全体の知識体系を高め、輝かせているのです。全ての人間の思考が、全ての人の知識に貢献してきました。そして、知識のこの核心を把握できるようにしてきたのです。

MM8：全体の流れに溶け込んで行くみたいなのですね。あなたが1945年生まれということは、第二次世界大戦の終わった年ですね。きっと、戦後の新しい時代をクリエイトする、何か大きなパートを演じているのだと思います。これからいっぱい書きたいことがあるようですね。ぜひ、今後も素晴らしい活動を続けてください。今日は長い時間、本当に有り難うございました。

ハッチソン：こちらこそ、とても楽しかったです。将来も情報交換したり、仕事出来るといいですね。ウィルスに犯されることなく、社会全体に情報を自由に流すお役に立てれば嬉しいです。



マイケル・ハッチソン氏 プロフィール Michael Hutchison Profile

マイケル・ハッチソンは、哲学と宗教を教える大学教授の息子としてアメリカ中西部の町や市を移り住みながら成長した。青年時代には、野球、フットボール、バスケットボール、水泳、飛び込みなどの競技大会に参加し運動選手として活躍。大学で哲学と文学を優秀な成績で修めた後、デューク大学大学院で文学研究のための奨学金を授けられる。

ベトナムへのアメリカの関わりには断固反対し、召集に際しては良心的兵役忌避者として2年間の「代行軍役」に就く。この時期、1960年代後期、ニューヨーク市のロウアー・イースト・サイドのゲットーで、家出青少年と住所不定少年のための収容施設の運営にあたった。ニューヨーク市に住んでいた間、オフ・ブロードウェイの劇場に俳優として出演したり、雑誌や種々の出版物に記事を書き始める。それ以降の25年間、広く旅をしながらも、ハッチソンはニューヨークのロウアー・イースト・サイドに居を構え続けた。

ある時期数年間にわたって、人里離れた山の中の丸太小屋に一人で住む。ここで初めて「感覚遮断」による「変容された意識状態」や、その他の精神的変化を体験。その後、フローテーション・タンクの効果を調査する探求を開始。何年か後に、再びニューヨーク市にもどり、時には8～10時間にも及ぶフローテーションの集中体験の時期へと入る。これらの体験は、『フローティングの本：個別の海の探求 (The Book of Floating: Exploring the PrivateSea)』として出版された(1984)。

1970年代後半と1980年代始め、中央アメリカに住み、旅を続ける。グアテマラ、エル・サルバドル、ニカラグアなどで当時起きていた文化的および政情不安や革命を目撃し、自らも参加。一時期、アナスタシオ・ソモサの政府に対抗していたサンディニスタ・ゲリラと行動を共にする。この間、右翼の死の分隊に捕らえられ、短期間だが投獄され、グアテマラで秘密警察の拷問を受ける。中央アメリカに関する彼の手記はいくつもの雑誌や新聞に発表され、1979年『中央アメリカ (Central America)』を上梓(改訂版1981)。

『フローティングの本』を出版後、ハッチソンは神経工学の分野における新しい研究や発展を調査探求。さらに、当時出現しつつあったハイテク脳刺激機器が、フローテーション・タンクのように、ピーク・パフォーマンス体験を生み出し、脳の機能を最善の状態へと導くことに注目。このレポートは『メガブレイン：脳の成長と意識拡大のための最新機器とテクニック (Megabrain: New Tools and Techniques for Brain Growth and Mind Expansion)』という本として出版された。

ハッチソンの神経工学と情報理論の研究は、やがてセックスと権力の間関係の洞察へと導かれていく。この洞察には、権力にはセックスと同じほど強い生物学的根拠があり、セックスと権力とは融合していること、さらに我々の世界は政治的イデオロギーの仮面を被った性的欲求によって、そして性的道徳訓または性的体験という仮面によって隠された権力への追求によって動かされているという発見も含まれている。

これらの調査・研究結果は、進化生物学、人類学、神経解剖学、生物政治学、そして情報理論など多岐の分野にわたって言及した、洞察力に溢れ多大な影響力を秘めた本『性と権力の解体学——マインドの政治学に関する調査報告 (The Anatomy Of Sex and Power : An Investigation of Body —— Mind Politics)』にまとめられた。この本の執筆中、ニューヨークからカリフォルニアへ移り、現在サンフランシスコの北のマリン・カウンティに住む。小さな息子、ゲイレンを愛する父でもある。

マイケル・ハッチソンの国際的ベスト・セラー『メガブレイン：脳成長と精神拡大のための最新機器とテクニック』は、哲学者ロバート・アントン・ウィルソンによって「1980年代のもっとも重要な本」と讃えられ、脳の機能を増進させる現代技術工学の活用に関する爆発的な興味を世界的なスケールで引き起こした。（日本語版は2000年に：「メガブレイン－脳の科学的鍛え方」（法令出版）として発刊）

この本は、「ブレイン・マシン運動の聖書」、「消費者向けサイクロニクスの分野のための基本的参考書」などと称賛され、そしてその著者は「マインド・マシン革命のハイテク・グル」と紹介された。

ハッチソン氏は、数々の賞を受けた作家であり、特に科学と文化の間の相互作用に関する考察は、『ザ・ニューヨーカー』によって「最先端を切っている」と賞されている。彼の著作は『エスクワイアー』、『ザ・バルティザン・レビュー』、『プレイボーイ』、『ザ・ヴァレッジ・ヴォイス』、そして『ニュー・エイジ・ジャーナル』などに発表されてきた。

彼はまた、マインド・テクノロジーの非営利研究団体であるニューロ・テクノロジー・インスティテュートの創設者であり、この分野で最も大きな影響力をもち、その質の高さで尊敬を集める『メガブレイン・レポート：マインド・テクノロジー・ジャーナル』の発行者であり、編集者でもある。神経工学の分野における先駆者ジョン・リリー博士によって「最高傑作！」と称賛され、作家マリリン・ファーガソンによって「強力な変容のテクノロジーへの包括的かつ実用的ガイド」と評された『フローティングの本』の生みの親でもある。

発行：株式会社エムエムエイト
東京都八王子市東浅川町 917-4-101
<http://style21.co.jp/>